

5歳児の自己概念と父母に対する愛着との関連

—愛着の内的ワーキングモデルを中心に—

李 和 貞

問題と目的

幼児は自分自身の存在についての価値的な概念をどのように発達させていくのであろうか？

多くの研究によって自己概念は、個人の行動、感情、動機、社会性、仲間関係およびパーソナリティの発達にまで影響を及ぼす（Coopersmith, 1981; Harter, 1982; Damon & Hart, 1988）と示唆されている。しかし、従来の自己概念に関する研究は、青年期を対象にしたものが多く、幼い子どもを対象とした研究は非常に少ない（Beane & Lipke, 1980; Bernstein, 1980）。その理由として、発達上の幼児期における言語表現力の制限、また方法上の困難などが考えられる。

子どもを、自己実現化（self-actualization）を遂げていく発達の途上にある存在としてとらえるとき、自己実現化を援助していくためにも、子どもの自己に対する意識を実証的にとらえる必要がある。また、この時期の著しい言語発達と様々な認知能力の発達を考えると、ある程度言語を媒介とした自己概念についての調査は可能であると考えられる。

人間行動における重要な説明変数としての自己概念は、その定義においても研究者によって異なる観点から捉えられている。例えば、個人の自我実現、幸福感における重要な影響力をもつ心理的要因とするものや（Coopersmith, 1981）、自己についてもっている知識のネットワーク（Markus & Wurf, 1987）とするものがある。また、Harter（1982）は、自己に対する評価的態度、価値判断であると定義し、李（2002）は自分自身によって認知された自己の価値と受容感に関する自己表象であると捉えている。一般的に、自己概念は他者との関わりにおいて、自分自身によって認知された様々な側面における自己の内容を意味する。

肯定的な自己概念がその人の社会的情緒的な発達過程において重要な役割を演じると考えられるとき、子どもの自己概念の発達はどのような社会環境的な要因から影響を受けるのであろうか？

GecasとSchwalbe（1986）は、子どもの自己の発達において、最も重要で決定的な要因は親及び家庭であると示唆しているが、一般に、家族構成員との親密的で集中的な相互作用が行われる家族環境は、子どもの自己に対する発達過程において重要な場であると考えられる。

そこで、親子の関係性に注目し、子どもの家族経験と社会情動的な発達の関係を説明する愛着理論にアプローチすることができる。

本格的な愛着の研究は、Bowlby（1958）が、母子関係の成立を説明するための構成概念の一つと

して子どもが母親に見せる心の結びつきを「愛着（attachment）」という概念で主張し、彼が精神分析理論を改正して動物行動学的な行動統制体系理論を導入してから始められた。（Ainsworth, 1978, 1979）。Bowlbyによれば、愛着関係とは、子どもが求めるセキュリティ・レギュレーションと親が供給する安心、保護、なだめ、やすらぎ、援助に関連する非対称的（asymmetrical）、あるいは補完的な（complementary）人間関係である。

1970年代に入ってから、Ainsworthら（1978）は、子どもの一貫した行動特性や母-子関係性の個人差を評定するための一つの方法としてストレンジ・シチュエーション法を考案した。この方法は一般によく知られ、それに基づいた愛着研究が多数行われた。

しかし、このようなストレンジ・シチュエーション法を用いた行動的指標からの愛着研究は、その評定の対象が乳児という限界があり、幼児や児童において適用することは難しい。また、ストレンジ・シチュエーション法に依存した行動的指標では、行動に反映されるものしか推定できず、表象レベルでのこどもの愛着そのものを取り出すことはできないと考えられる。

それだけでなく、外的な愛着行動のパターンに依存したストレンジ・シチュエーション法では、Bowlby（1969）の「人生早期において構築された個人のパーソナリティ内部の愛着パターンは、その個人の生涯における愛情の絆の型をある程度規定する」という愛着のパターンの連続性と一貫性を検証することは不可能である。

そのような限界から、次第に、愛着研究は行動レベルから表象モデルに移移していく関係として捉えられ、また乳児期を越えて生涯にわたる人間の発達における重要な心理的關係性として注目するようになったと言えよう。

また、対象年齢の拡張と共に、表象レベルの愛着の研究は、成人愛着研究をはじめとする、愛着のワーキング・モデルに焦点を当てた新たな展開を見せた。

Bowlby（1973）によれば、乳児期に形成された養育者に対する愛着は、そのままの形で持続されるのではなく、時間の経過とともに自己と他人に対する信念として再構造化される。またBowlbyは、その再構造化されたものを、内的ワーキング・モデル（internal working model）として命名し、「自己についてのワーキング・モデル（自己概念）と愛着人物に対するワーキング・モデル（愛着）とは補完的な関係から構築される」と主張した。

このような観点から、本研究では、内的ワーキング・モデルの発達の形成時期として重要視される5歳児（Bowlby, 1973）を中心に、子どもの表象レベルの愛着のワーキング・モデルと幼児の自己概念との関係について検討する。

人間のlife-spanにおける発達の様々な研究の中で、中心的な理論は自己（self）に関する理論であるとの知見（Cassidy, 1990; Chon, 1990）から示されるように、幼児の自己概念に注目して検討することは、その後の児童期、青年期へと移行していく過程において重要な手がかりを提供すると考えられる。

また、従来の愛着研究のアプローチは、主に母子関係を中心とした一面的な水準にとどまってい

ると言えるが、子どもの世話をする父親も重要な愛着人物となり得る。

そのような視点から、本研究では、親子関係を家族というより全体的な観点から捉え、その主要な愛着人物として母親だけでなく、父親にも注目する。その上で、子どもをめぐる母－子関係、父－子関係を比較し、家族システムというより全体的な観点から検討する。

本研究において、自己概念とは「自分自身によって認知された自己の価値と受容感に関する自己表象」として定義する。

方 法

被験児

予備調査（5歳児10名）を通して尺度を検討・若干修正し、本研究では、東京都内の幼稚園に通う36名（平均5.3歳）の園児が最終的な分析の対象となった。

手続き

調査は、約1ヶ月間にわたって、すべて個別面接法で各幼稚園の個室（園長室、会議室、絵本室）で行われた。日本語が第二言語である本人が実験者となるため、本調査に入る前に熟練の幼稚園の先生から協力を得て、十分な検討と調査用言語の練習が行われた。また、一人あたり約25分～35分の所要時間が必要となるため、本研究では、一人2回にわたる個別面接を行った。

個別面接の材料としては、母に対する愛着ストーリー完成課題、父に対する愛着ストーリー完成課題、puppetインタビュー、受容感の尺度を用いたが、ほぼ同数の男女児を無作為に以下のような各グループに分り当てて面接を実施した。また、第1回目と2回目に実施する両尺度間において、以下の2つのグループに分けて順序のカウンタバランスをとった。

Aグループ

- 1 回目の面接：母に対する愛着ストーリー完成課題／puppetインタビュー
- 2 回目の面接：父に対する愛着ストーリー完成課題／受容感尺度

Bグループ

- 1 回目の面接：父に対する愛着ストーリー完成課題／puppetインタビュー
- 2 回目の面接：母に対する愛着ストーリー完成課題／受容感尺度

材 料

父・母に対する愛着安定性の測定

愛着ストーリー完成課題尺度 (*Attachment story Completion task*) (Cassidy, 1988, Bretherton et al., 1990; Verschuere et al., 1996, 1999)

本研究における各場面のストーリーは、先行研究（Cassidy, 1988, Bretherton et al., 1990; Verschueren, 1996, 1999）に基づいて構成されている（TABLE 1-1, 1-2）

各課題には、それぞれ、愛着に関わる特定のストーリーが織り込まれている。

被験児が実験者（本人）と向かい合って着席してから、実験者は被験児の名前を聞き、まず、ドールファミリの登場人物（主人公：花ちゃん／太郎君）を紹介した。そして、各ストーリーに、実験者は5歳児の被験児が分かりやすい口調で、各ストーリー課題の導入部でTABLE 1-1のようなストーリーのセッティングを呈示し、その後、「○○ちゃんは、このあと、何が起こったと思う？ママ（パ

Table 1-1 「愛着ストーリー完成課題」母親用
(Attachment story completion task)

1 Child-Mother Attachment
ストーリーⅠ 夕食のテーブルについているとき、子どもが不意にジュースを床にこぼしてしまった。そして母親は声高く叫ぶ
ストーリーⅡ 母親と公園に散歩に出かけているとき、子どもが岩にのぼり、落ちてしまい、ひざを怪我をした。そして子どもが泣き出している
ストーリーⅢ 子どもが寝ようとして部屋に入るが、部屋に怖いものがあるのを見て大声で叫ぶ
ストーリーⅣ 両親が一泊の旅行に出かけ、祖母と子どもが家に残る
ストーリーⅤ 次の朝、祖母が窓から外を見ながら、両親が帰ってきたことを子どもに告げる

Table 1-2 「愛着ストーリー完成課題」父親用
(Attachment story completion task)

2 Child-Father Attachment
ストーリーⅠ 子どもが父親と食事をしている。ところが、子どもが嫌いなおかずがあって、父親に食べたくないと言う
ストーリーⅡ 子どもが公園で遊んでいた。家に帰ろうとするが自転車が盗まれたことに気づく。その時、父親が公園の方へ歩いて来る姿を見える
ストーリーⅢ 夜、外から怖い音（雷）が聞こえて、子どもが目覚ます
ストーリーⅣ 仲間が家に遊びにきたが、喧嘩になってしまった。その仲間は家に帰り、子どもが泣き出している

パ）はどうしたのかな？お姉ちゃん（実験者）に聞かせて。」と言い、被験児にストーリーを完成させた。被験児が課題にうまくのれない時や発言内容が曖昧なときなどには、「～したら花子ちゃん（太郎君）はどうするの？」あるいは「～したらママ（パパ）はどうするかな？」というような補助質問がなされた。

各児のストーリーから、先行研究の分類基準にもとづいて、各ストーリーに反映されている各児の愛着のワーキング・モデルの質が測定された（Cassidy, 1986, 1988, Bretherton et al., 1990; Verschueren, 1996, 1999, Cassidy & Marvin, 1992）。

全体的な分類にもとづいて、各児は総体的に安定群、回避群、アンビバレント群の3つのパタンのどれかに分類され、また各ストーリーの得点の合計から総体的な愛着安定性得点が算出される。高得点であるほど、子どもは愛着人物との安定した関係性を示している。

自己概念

puppet インタビュー

実験者（本人）は、被験児がもっている手使い人形（hand puppet; リス，“ポポちゃん”と名付けられた）に向かって「被験児についてどう思っているか」に関する先行研究にもとづく10項目の質問を向けると、幼児はその質問に対し「自分自身に対する第3者の考え」として想像した答えを、人形（ポポちゃん）を通して人形の言葉として答える。

質問項目は、Bowlby（1973）の「自己の内的ワーキング・モデルには、自己のイメージについて、現在、その人が知覚している内容が含まれている」との見解のもとに、先行研究（Harter & Pike, 1984; Cassidy, 1988; Verschueren, 1996; Verschueren, 1999）から選定した10項目であった。

具体的な質問内容をTABLE 2に示す。

各質問に対する幼児の回答は、予備調査からの問題点を踏まえて、先行研究（Yuu, 1996）を参考

Table 2 Puppet インタビュー 質問内容

質問内容
ポポちゃんは〇〇ちゃんのことが好きですか
ポポちゃんは〇〇ちゃんとお友達になりたいですか
〇〇ちゃんは大切な人ですか、大切ではない人ですか
ポポちゃんは〇〇ちゃんが大変なとき、助けてあげますか
ポポちゃん、〇〇ちゃんは特別な人ですか
ポポちゃん、〇〇ちゃんはお友たちと仲がいいですか
〇〇ちゃんは格好いい（かわいい）人ですか
ポポちゃん、〇〇ちゃんは頭がいい人ですか
〇〇ちゃんのお友達は〇〇ちゃんのことが好きですか
ポポちゃん、〇〇ちゃんは幸せですか

に円の大きさによる3段階評定とし、直径1, 2.5, 4 cmである円（○ ○ ○）によりその程度を選択するようにした。また、円の大きさ順に1, 2, 3点と得点化した。点数が高くなるほど、幼児の自己に対するイメージは肯定的であると考えられる。

尺度の内部一貫性の指標であるクロンバック α 係数は .91 で非常に高い値を示している。

受容感

本研究では、幼児の自己概念における重要な側面として、幼児が知覚した身近な他人との受容感に着目し、Harter & Pike (1984) が考案した尺度における、「認知された受容感」、すなわち、「仲間からの受容感 (peer acceptance)」及び「母親からの受容感 (maternal acceptance)」の項目にもとづいて評定を求めた。この尺度で測定されている特性は、子どもによって認知された (perceived) 受容感であり、幼児の自己に対する表象を反映している尺度として用いることができる (Verschuere, 1996; Verschuere, 1999)。質問項目は、なるべく元尺度を生かし、日本の幼児においてどうしても当てはまらないと考えられた1項目（「友だちの家に泊まりに行きますか」）に対しては、桜井 (1985) を参考に両国の幼児に当てはまるように修正した。なお、母親の受容感においては、乳幼児精神発達診断法の質問項目を参考に構成された桜井 (1985) の質問項目から1項目（「お母さんはほめてくれますか」）を追加した。各質問に対する幼児の回答は、先行研究 (Yuu, 1996) にもとづいて肯定的・否定的な絵を一つ（人物の表情は中立的）にして提示し、上で示した *puppet* インタビューと同じような方式で、円の大きさによる評定を行った（4段階評定）。絵カードは男児が描かれている男児用と女児が描かれている女児用の2セットであるが、項目内容は同じである。

本研究から求めた、尺度の内部一貫性の指標であるクロンバック α 係数は、「仲間からの受容感」で、.83, 「母親からの受容感」で、.84 と高い値を示している。Harter & Pike の原尺度の場合（順に、.75, .81）と比較して若干高い傾向を示している。

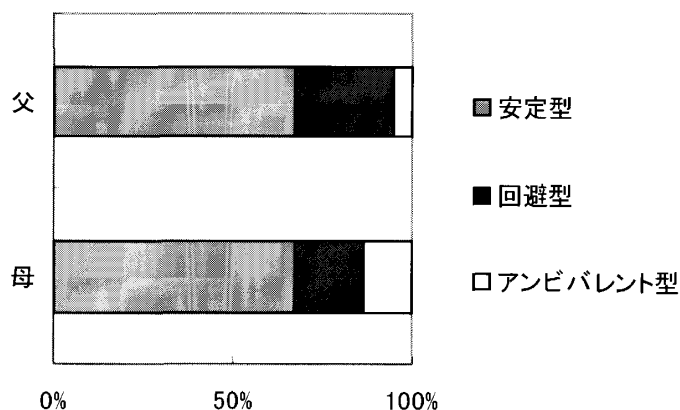


Figure 1 父母に対する幼児の愛着のパターン

結 果

父母に対する愛着のパターン

各ストーリーは3点法で評定され、安定（secure）型／回避（insecure-avoidant）型（／アンビバレント（insecure-bizarre/ambivalent）型／分類不可（secure/insecure）のどれかに分類された。また、各ストーリーについて74ケースの中22ケース（30％）を2人の評定者が評定したところ、3点法による評定の一致率は91％であり、愛着の質（安定型、回避型、アンビバレント型）に関する分類の一致率は87％であった。不一致のケースについては協議によって一致した評点を求めた。

その結果、愛着のパターンは、母親の場合、安定型が66％（24名）、回避型が19％（7名）、アンビバレント型が13％（5名）であり、父親は、66％（24名）、27％（10名）、5％（2名）であった（FIGURE 1）。

このような結果は、幼児を対象とした他の先行研究と、ほぼ同水準を示していると言える（例えば、60％ in Turner, 1991; 58％ in Shonldice & Sterenson-Hinde, 1992; 55％ in Chon, 1990; 60％ in 久保田, 1994）。

父母に対する愛着と自己概念の関係

分析では、「安定群」及び回避型とアンビバレット型を合わせた「不安定群」の2群に分類して分析を行った。研究目的に沿って、自尊感情と受容感を従属変数に、母親（父親）に対する愛着の質（安定・不安定）と性を独立変数に多変量分散分析（Multivariate analysis of variance, MANOVA）を行った。結果をTABLE 3に示す。

その結果、母親の愛着に対する多変量の主効果が5％水準でみられ、母親に不安定的な愛着を有する幼児より、安定した愛着を有する幼児が、自尊感情（ $F(1, 32) = 7.92, p < .01$ ）と受容感（ $F(1, 32) = 8.25, p < .01$ ）において有意に高かった（FIGURE 2）。言い換えれば、母親に対して安定的な愛着の幼

Table 3 MANOVAの結果

要 因		T ²	Λ	F	有意水準
母	愛着の質	0.328	0.753	5.085*	0.012
	性	0.138	0.878	2.146	0.134
	交互作用	0.050	0.952	0.779.	0.467
父	愛着の質	0.024	0.977	0.390	0.695
	性	0.078	0.928	1.211	0.312
	交互作用	0.038	0.964	0.586	0.563

* $p < .05$

注) Fの自由度は2と31。ここではどれも2群間の比較になるので、T2とΛによるFの値は完全に一致する。

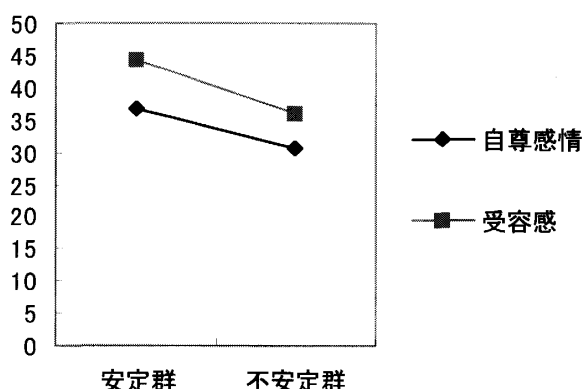


Figure 2 母親に対する愛着の質と幼児の自己概念の関係

児は、不安定群の幼児よりも有意に高い自己概念の自尊感情（self-esteem）をもち、また受容感においても有意に高い自己概念を有することが示唆された。

全体的に母親に対する愛着に関しては、Bowlby（1973）の仮説、「自己についてのワーキング・モデルは愛着人物に対するワーキング・モデルと補完的な関係から構築される」は支持されたと言えよう。ところが、子どもの世話をし、発達に重要な意味をもつ愛着人物としての父親においては、母親と同じような補完的な関係性を確認することができなかった。

考察及び今後の課題

愛着パターンの出現比率について

本研究の日本の母親に対する愛着パターンの比率（安定型66%，回避型19%，アンビバレント型13%）が、Miyakeら（1985）やTakahashi（1986）の愛着の研究によって報告された日本人の生後12ヶ月～18ヶ月の乳児における母親に対する愛着パターンの比率（例えば、安定型68%，回避型0%，アンビバレント型32% in Takahashi, 1986）と比べ、回避型とアンビバレント型の出現比率が異なっているがことは注目に値する。Takahashiらは、アンビバレント型と分類された乳児の出現比率が高く、回避型が皆無であったと報告している。

愛着パターンの国際的比較（Sagi & Lewkowicz, 1987）によると、アメリカのサンプルでは、安定型：回避型：アンビバレント型の出現比率が65%：20%：13%を示しているに対し、日本のサンプルでは、東京が67%：14%：19%，また、札幌が68%：0%：32%となっていてどちらのパターンにおいても回避型が低率である。

Miyakeら（1985）とTakahashi（1986）は、アンビバレント型の高い比率に関して、Ainsworthら（1978）のストレンジ・シチュエーションの手続きそのものに潜在している問題点について言及している。すなわち、ストレンジ・シチュエーション法で与えられる「ストレスおよび見慣れぬ程度」は、欧米の乳児と比べて日本の乳児の方がより強いということからアンビバレント型が増大すると解釈している。

そして、日本人の乳児においてストレスがマイルドになるようにストレンジ・シチュエーションの手続きを考案する必要性があると提起している。また、その他の理由として、親子関係を規定する文脈的な要因として、親子関係を取り巻く育児環境などの文化的な意味合い・背景が、このストレンジ・シチュエーションの手続きに反映されてくる可能性があるとは指摘している（例えば、Miyake, Chen, & Campos, 1985）。

このような、固有の文化的な要因によって制限されると考えられるストレンジ・シチュエーション法と比べ、本研究で用いた尺度、すなわち、子どもの愛着人物に対する内的ワーキング・モデルに着目し幼児の愛着の質を測定する方法は、愛着のパターンの出現比率からみて、ストレンジ・シチュエーションの手続き持つ問題点、文化という独自の要因をある程度克服することができたと考えられる。

愛着表象と自己表象との関係について

本研究では、自己への評価と価値において最も重要な影響を有すると考えられる幼児の自己概念が、母親に対する愛着表象と密接な関係性があると示され、Bowlbyの自己と愛着の補完的な（complementary）関係に関する仮説は妥当であると考えられた。しかし、子どもの世話をし、発達に重要な意味をもつ愛着人物としての父親においては、反映的關係性を確認することができなかった。

本研究で得られた父・母間における異なる結果から、子どもの愛着のワーキング・モデルをめぐって以下の二点をあげることができる。

第一に、父子関係、母子関係の相互作用をめぐって形成される子どもの愛着人物に対するワーキング・モデルの關係的・機能的な側面に注目できる。

父子関係に焦点を当てた知見からは、日々繰り返される親子間の相互作用（日常的な関わり）が父・母それぞれにおいて内容的・機能的に規定されていることを示唆している。例えば、母親と父親の行う行動は機能的に異なるとの知見（Lamb, 1981）、遊びやケアといった養育の内容的な面における父母間の差に関する知見（Parke & Sawin, 1975）などがある。このような知見から考えられることは、「愛着人物からどのようなものを期待しているのか（Bowlby, 1973）」にかかわる子どもの「愛着の内的ワーキング・モデル」は、父母に対して内容的・機能的に異なる相互作用を経験する。そして、それに基づいて子どもは父・母それぞれに対するワーキング・モデルを形成し、また、それによって、ワーキング・モデルの本質的な機能である「適応行動をガイドする」役割を果たす。そのため、父親に対する子どものワーキング・モデルは、必ずしも、子どもの自己、他者および世界において、母親に対する愛着のワーキング・モデルが見出すような自己に対する密接な同質的關係を示すとは断定できないと考えられる。

子どもの父親に対する愛着表象が、具体的にどのようなパーソナリティの領域と密接に関連してい

るのかに対しては、今後のさらなる研究が期待される。

第二に、父親に対する子どものワーキング・モデルは、母親に対する子どもの愛着のワーキング・モデルの形成過程と比べ、異なるプロセスを有するということが推測される。

愛着人物に対するワーキング・モデルの形成過程は、愛着人物との実際の相互作用経験から構築されることを仮定しているが、（例えば、安定した愛着の経験を経た子どもは、「求めれば受容してくれ、近づきやすく、安心の基盤を提供してくれる」という愛着人物に対するワーキング・モデルを構築する）、日常生活において幼児は父親と接する機会が少ない。そこで、父親に対する愛着表象の構築においては、子どもは直接体験する実経験のみならず、他の要因を組み込みこんでいるということが推測されるのである。他の要因とは特に母親からの影響である。子どもが父親に対する愛着のワーキング・モデルを形成する際の、そのモデルの形成のためのデータとして、日々の父親との実経験のみならず、最も親密な第3者である母親から得た情報の存在があり、それは見逃すことはできない要因である。

すなわち、子どもの父親に対するワーキング・モデルの形成において、子どもの第1の養育者で子育ての重要な担い手としての役割をもつ母親の、父親に対する表象は言語などを手段として子どもに伝達され、父親に対する子どものワーキング・モデルの形成に反映されると考えられる。

Nelson (1989) は、2歳児 (Emily) を対象とした研究を通して、未来を予測する際の子ども (2歳児) の情報源は、自分が直接経験して得られた知識のみならず、他者から伝達された情報をも統合していることを見出した。

この Nelson (1989) の研究結果は、子どもが他者から得た間接的データを利用し得るということを有力に支持している。

このような知見から考えられることは、ワーキング・モデルは経験を越えて機能するものであり、また父親に対する子どものワーキング・モデルにおいて「母親」の存在は父親についての有効な情報を与える情報源の一つとして意味を有するということである。換言すれば、子育ての主な担い手として機能し、また子どもと過ごす時間が最も多い母親は、子どもとの相互作用を通して、父親に対する子どものワーキング・モデルの形成プロセスにかかわる機能的な意味をも有すると考えられる。

今後の課題としては、より全体的な行動様式及び環境要因を考慮した養育態度との関連、また幼児の愛着形成における父母の機能的な相互作用に注目し、父母に対する愛着形成のプロセス及びその変容の可能性をめぐる愛着表象の更なる縦断的研究が必要である。そして、展開しつつある愛着表象をめぐる研究から示唆される知見（例えば、愛着表象の形成プロセス、愛着表象を規定する下位構造に関する視点）に注目し、どのように子どもの愛着表象が、自己、他者、世界に対する表象へと分岐していくのかというメカニズムの解明に関する更なるアプローチが必要である。

参考文献

- Ainsworth, M. D. S. 1979 Infant-mother attachment. *American Psychologist*, 34, 932-937.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Beane, J. A., & Lipka, R. P. 1980 Self-Concept and Self-Esteem. A Construct Different ion, *child study*, 10, 1-6.
- Bernstein, R. M. 1980 The development of the self-system during adolescence. *Journal of Genetic psychology*, 136, 231-245.
- Booth, C. L., Pose-Krasnor, L. & Rubin, K. H. 1991 Relating preschoolers's social competence and their mothers' parenting behaviors to early attachment security and high-risk status. *Journal of Social and Personality Relationships*, 8, 363-382
- Bowlby, J. 1976 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子 (訳) 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動, 東京, 岩崎学術出版社.
[Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss, vol. 1: Attachment*. London, Hogarth.]
- Bowlby, J. 1977, 1991 黒田実郎・岡田洋子・吉川 (訳) 母子関係の理論Ⅱ：分離不安, 東京, 岩崎学術出版社.
[Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss, vol. 2: Separation*. London, Hogarth.]
- Bowlby, J. 1977, 1992 黒田実郎・岡田洋子・吉川 (訳) 母子関係の理論Ⅲ：対象喪失, 東京, 岩崎学術出版社.
[Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss, vol. 3: Loss, Sadness and Depression*. London, Hogarth.]
- Bowlby, J. 1981 作田勉 (監訳). 母子関係入門, 東京, 星和書店. [Bowlby, J. 1979 *The Making and breaking of affectional bonds*. London, Tavistock publications limited.]
- Bowlby, J. 1988 *A Secure Base*. New York: Basic Books.
- Broughton, J. M. 1978 Development of concepts of self, mind, reality and knowledge. *New Directions for Child Development*, 1, 75-100.
- Bretherton & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research, monographs of society for research in child development 50, (1-2). Serial No. 209.
- Bretherton, I., Ridgeway, D., Cassidy, J. 1990 Assessing internal attachment story completion task 3-year-olds. In M. T. Greencurg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool Years* 273-308. Chicago: University of Chicago Press
- Cassidy, J. 1988 Child-mother attachment Attachment and the self in the six-year-olds. *Child Development* 59, 121-134.
- Cassidy, J., & Marvin, R. S. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development* 63, 350-365.
- Chon, D. A. 1990 Child-mother attachment of six-year-olds and social competence at school. *Child Development* 61, 152-162.
- Colin, V. L. 1996 Human attachment. New York: McGraw-Hill.
- Dalenoort, G. j. (1990) Toward a general theory of representation. *Psychological Research*, 52, 229-237.
- Demon, W., & Hart, D. 1998 *Self-understanding in childhood and adolescence*. Cambridge University Press.
- Denis, M. (1994). *Image and cognition* (2nd ed.). Paris: Presses Universitaires de France.
- Easterbrooks, A., & Goldberg, W. 1990 Security of toddler-parent attachment: relation to children's sociopersonality functioning during kindergarten. In M. T. Greencurg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool Years* 221-244. Chicago: University of Chicago Press.
- 遠藤利彦 1992 内的作業モデルと愛着の世代間伝達, 東京大学紀要, 32 203-220.
- Feeny, J. A., & Noller, P. 1990 Attachment styles as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 58, No. 2, 281-291.
- Gecas, V., & Schwalbe, M. 1986 Parental behavior and adolescent self-esteem. *Journal of Marriage and the Family*, 48, 37-46.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scales for children, *Child Development* 53, 87-97.
- Kestenbaum, R., Farber, E. A., & Sroufe, L. A. 1989 Individual differences in empathy among preschoolers: Relation to attachment history. In N. Eisenberg (Ed.), *Empathy and related emotional responses*. *New Directions for Child*

- Development*, 44, 55-64.
- Kobak, R. R., & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescence Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development* 59, 135-146.
- Kwon, U, Lee, K., Shin, Y., & Kim, T. 1996 Personality, marital relationship, and social support in mothers with RAD children and normal children. *Korean Journal of Psychology*. 1996. Vol. 9, No. 1, 121-134.
- 久保田まり 1991 対人関係の内科モデルの発達：D. Sternの理論を中心に。発達研究, vol. 7, 225-242.
- 久保田まり 1994 アタッチメントの研究：内的ワーキング・モデルの形成と発達, 川島書店.
- Lamb, E., Thompson, W. P., & Charnor, E. 1985 Infant mother attachment: The origins and developmental significance of individual differences in strange situation behaviors. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- M. T. Greencurg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool Years* 87-119. Chicago: University of Chicago Press
- Miyake, K., Dhen, S. J., & Campos, J. J. 1985 Infant temperament, mother's mode of interaction, and attachment in Japan: An interim report. In I. Bretherton et al, (Eds.) Growing points of attachment theory and research. Monographs of the society for research in child development.
- Main, M., & Cassidy, J. 1988 Categories of response to reunion with the parent at age 6: Predictable from infant attachment classification and stable over a 1-month period. *Development Psychology*, 24, 415-426.
- Main, M., & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized / disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greencurg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool Years* 121-160. Chicago: University of Chicago Press
- Markus, H., & Wurf, E. 1987 The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-377.
- Rah, Yumee 1997 The characteristics of Korean infant's attachment behaviors. Yonsei University.
- 須田治・別府哲 2002 社会・情動発達とその支援シリーズ3, ミネルヴァ書房
- Takahashi, K. 1986 Examining the strange situation procedure with Japanese mother and 12-month-old-infants. *Developmental psychology*, 22, 265-270
- Yuu, H. 1996 The attachment behaviors and perceived competence in kindergarten. *Korea Journal of Psychology*. 1996, Vol. 9, No1, 110-120.
- Verschuere, K., Marcoen, A., & Schoefs, V. 1996 The internal working models of the self, attachment and competence in five-year-olds. *Child Development* 67, 2494-2511.
- Verschuere, K., Marcoen, A. 1999 Representation of self and socioemotional competence in kindergatners. *Child Development* 70. 183-201.
- Wartner, U. G., Grossman, K., Fremmer-Bombik, E. & Suess, G. 1994 Attachment patterns at age six in south Germany: Predictability from infancy and implications for preschool behavior. *Child Development* 65, 1014-1027.
- 李和貞 2002 子どもの社会情緒的の発達と父母の養育態度に関する研究, 日本理論心理学研究4, 22-23